スイス連邦、通称スイスは、ヨーロッパにある連邦共和制国家で、永世中立国です。地理的にはドイツ、フランス、イタリア、オーストリア、リヒテンシュタインに囲まれた美しい内陸に位置する国です。国内には多くの国際機関の本部が置かれ、公用語はドイツ語（スイスドイツ語）、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語です。このように他民族・多文化を持つスイスは、「一人はすべてのために、そして、すべては一人のために」を国の標語としています。この国にも多数の在住邦人がいます。次はスイスにある日本語教会からの報告です。

Ⅰ 教会誕生から今日まで①

日本語教会の歴史

主は日本と日本人を愛し、スイス人宣教師を日本へお遣わし下さいました。彼らは生涯の半生を、福音宣教に捧げてこられた神の器です。次に主は、スイス在留邦人にも福音を伝え、救霊の働きを成す教会（日本語で礼拝を捧げられる場所）を建て上げる思いを与えられました。それは今から二二年前、一九九三年夏のことでした。当時のスイスには、六，〇〇〇人を上回る日本人（駐在員、留学生、国際結婚を機に永住された方など）がいました。しかし、邦人のためのキリスト教会は一つもありませんでした。スイス最大都市チューリッヒに、ベーラー宣教師（元ＯＭＦ）が始められた日本語集会が唯一存在するのみでした。ベーラー師引退後、チューリッヒ大学神学部に学んでいた神学生に引き継がれたものの、木曜日昼間の開催ということで学生と主婦が少数参加していたのみでした。

ゲルスタ夫妻と長男アンドレアス君（1993年）

一九八九年、スイス人法律家ゲルスタ・ハンスウエリ博士と、英国人のウェンディ夫人が日本宣教へのビジョンを与えられ、ＯＭＦ宣教師として札幌に派遣されました。二人は第一期宣教（四年間）を終えて、デピュテーション（母国での支援教会回りや休暇）のため、一九九三年五月にスイスに戻って来られました。彼らは、多数の日本人が住むスイスに日本語で礼拝を捧げ、邦人宣教の基地となる日本語教会が一つも無いことに心を痛められ、真剣に祈りを捧げられました。スイスは小国でありながら、歴史的に日本への宣教に力を注ぎ、多くの宣教師を派遣してきました。ゲルスタ宣教師夫妻は、それらの諸宣教団体（ＬＭ／リーベンゼラー日本宣教団／本拠地・南ドイツ、ＯＭＦ／ÜＭＧ国際福音宣教団、ＳＡＭスイス同盟伝道団）や、かつて日本で労された元宣教師、またデピュテーションで帰国していた宣教師達に日本語教会設立ビジョンを熱く説いて回られたのでした。

ビジョンに応答

そのビジョンに呼応し、オーニンガー・マックス宣教師ご夫妻（ＳＡＭ）、シグリスト・ウルター宣教師ご夫妻（ＬＭ）、クンツ・アルトゥール元宣教師ご夫妻（ＬＭ）、ハウリ・ジャンヌ宣教師（ＯＭＦ／ÜＭＧ）、シュテルン元宣教師が集められました。ゲルスタ宣教師が属するウスター市クリショーナ教会のロート・ゲアハルト牧師も、その情熱に打たれ、宣教パートナーとして設立に参画されました。また日本人キリスト者側からも、田中伸二兄、吉田廣子姉、チューリッヒ大学で研究生活を送っておられた加藤雅也兄姉も加わり、一九九三年一〇月一〇日、日本語教会の設立に向け初めての会合が持たれました。

法学博士であったゲルスタ宣教師は、教会会則作成から教会誕生までの手続きを担われました。このようにしてチューリッヒの東に位置するウスター市の国鉄駅から徒歩で数分のクリショーナ教会（ゲルスタ宣教師夫妻の母教会）の一室を借り、夢にまで見たスイスで初めての日本語礼拝が一九九三年一一月二八日に持たれました。スイス日本語福音キリスト教会が、産声を上げた記念すべき礼拝には、日本人一一人、スイス人一四人が出席しました。そこで神に賛美と祈りを捧げ、み言葉を分かち合ったと記録にあります。

スイス日本語福音キリスト教会（スイスＪＥＧ）

スイスに誕生した唯一の超教派プロテスタント教会には、ウスターから一〇〇km以上離れたスイス各地、また南ドイツからも聖書を神のみ言葉と信じ、イエスを主と告白する兄弟姉妹が集まります。なかには、片道三時間もかけて御奉仕に来て下さる元宣教師もおられました。そんな特殊性から、礼拝は月二度（第二、第四日曜日）の午後四時から始められました。この開始時間は後に、翌日の勤務や子供達の登校に配慮して午後三時からと変更になりました。礼拝後には愛餐会と呼ばれる、それぞれが自慢料理を持ち寄ったビュッフェ形式の食事会が持たれ、月に二度しか会えぬ兄弟姉妹の貴重な交わりの時となっています。日本食を恋しがる留学生や来訪者が、すぐに家庭的雰囲気に溶け込めるのも別名〝食べる教会〟とも呼ばれ、霊のみに限らず体の充足にも心を配るスイスＪＥＧのもう一つの魅力となっています。　（つづく）

田辺牧師を迎えての修養会（1996年）

Ⅰ 教会誕生から今日まで②

遠くアルプスの白い峰々を仰ぐスイスに誕生した日本語教会は、異文化のまっただ中に住む邦人クリスチャンにどのような意味を持っているでしょうか。一九九三年、W姉妹は教会が設立された頃、リューマチの発病に始まり、胃癌、膵臓摘出、膝の人工関節手術、骨粗鬆症と次々に重い病に冒されました。しかしながら、彼女は今日に至るまで、優しい笑顔と愛で兄弟姉妹を励ましてくれています。次はW姉の証を引用します。

W姉妹の証し

「発病当時、私はスイスに日本語教会ができるなんて、考えてもいませんでした。まさに主の働き、奇跡としか言いようがありません。初めて礼拝に出席した時、日本語で聖歌を歌っていることが信じられませんでした。感動で胸が一杯になり、あまりの嬉しさに涙が溢れ仕方がありませんでした。〝ああ、私はこんなにも神様のみ言葉を聴くことに渇望していたのか。〟と知らされました。主を信じる者が集い、共に主を賛美し礼拝を捧げることが、どんなに大切かを知らされました。母国語でメッセージを理解出来るとは、こんなにも素晴らしいことだとは、日本に居たら決して知ることがない喜びでした。私はあの日の感動を、今もはっきりと覚えています。」

日本にいたら、礼拝での説教や賛美は日本語でなされることは当たり前で、感動を呼ぶことはありません。しかし、母国語を何日間も話すことがない社会では、決して当たり前ではありません。日本社会は因習に束縛されることが多いですが、外国で暮らすようになると、先ず束縛から解放されます。そしてキリストの福音に心を開き、救われる人たちが起こされます。その人数は、日本国内よりも多いと言われます。異国において母国語で福音を聴き、交わりを持つことのできる日本語教会（集会）の存在は、どんなに大きな意味を持つかお分かり頂けると思います。

スイス日本語福音キリスト教会　JEG

スイスJEG創立の立役者であるゲルスタ宣教師夫妻は、翌年一九九四年春に任地札幌に戻られました。その後、教会はしばらく無牧でしたが、元宣教師や帰国中の宣教師、クリショーナ教会のゲアハルト牧師が説教してくださいました。必要に応じて通訳もつけられました。一度だけテープで説教を聴き礼拝を守ったことがありましたが、一六〇回に及ぶ礼拝には、いつも説教者が与えられました。申命記の約束のことば、**「あなたの神、主が、絶えずその上に目を留めておられる地である。」**（11・12）の通りで、実に豊かな神様の祝福と恵みでした。

その後、一九九三年からドイツ・デュッセルドルフ日本語教会を牧会された田辺正隆牧師が導かれました。田辺牧師は、フランクフルト日本語福音キリスト教会を兼任しながら、奉仕してくださいました。そして二〇〇〇年二月、スイスJEG牧師として正式に着任して下さることになりました。田辺牧師はデュッセルドルフ在任中、年に最低一度は説教者として、また修養会メッセンジャーとして、ご夫妻で奉仕してくださいました。田辺牧師夫妻は往復八〇〇㎞もの遠距離を物ともせず、七年余り御奉仕くださいました。スイスの信者は大きな信頼を寄せていましたが、まさか遠いスイスに牧者として赴任くださるとは夢にも思いませんでした。

ルツ&アルトゥール・クンツ宣教師夫妻は、二三年に渡り日本で宣教に励んでくださいました。ご夫妻は今なお、スイスJEGで大切な位置を占めるメンバーです。クンツ師は**「まことに、神であられる主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。」（エゼキエル34・11）**と語っておられます。田辺牧師の就任が決まった時、〝主はスイス教会に日本人牧師を！、という篤い祈りにお応えくださった。〟と喜びを表現されました。

田辺牧師ご夫妻

田辺牧師は、第二、第四週末を、ウスターでの礼拝を中心に、バーゼル、ベルン、オルテン、ウスター、そしてドイツのボーデン湖畔の街メアスブルグの家庭集会と、まるで青年のような情熱をもって福音を語り回られました。それら家庭集会での聖書の学びを通し、救いに導かれる日本人も出てきました。また、田辺牧師夫人のみや子先生は五八歳でドイツに来られ、車の運転を覚えられました。二〇〇三年に心筋梗塞で倒れる（その後回復された）まで、バーゼルとベルンの集会を担当くださり、田辺牧師を補佐し重要な働きをしてくださいました。

しかし、いくら運転が苦にならないといっても、七〇歳を越える牧師が、毎回八〇〇㎞から九〇〇㎞もの長距離を運転されるものですから、さすがに日本の支援会からも心配する声が出ました。二〇一〇年に、フランクフルト日本語福音キリスト教会の専任牧師としての働きに専念するため、後任牧師に道筋をつけて惜しまれつつ退任されました。（つづく）

田辺正隆牧師、みや子先生

Ⅰ 教会誕生から今日まで ③

スイス日本語福音キリスト教会（JEG）の誕生に深く関わられたゲルスタ・ハンスウエリ宣教師夫妻がおられます。二〇〇九年六月、ご夫妻は札幌での宣教活動を終了され、二人の子供さんの高等教育のためにスイスに戻られました。その翌年、スイスJEGの牧会は田辺牧師からゲルスタ牧師に引き継がれることになりました。牧師就任式は二〇一〇年七月一一日、隣国イタリア・ミラノ賛美教会の内村伸之牧師によって執り行なわれました。

ゲルスタ牧師の辞任

しかし、ゲルスタ牧師は三年目を迎える前に、大変残念ながら健康に不調をきたされました。そこで、説教をはじめとする牧会を断念されることになりました。主が牧者の力を弱める事をお許しになられたため、それまで牧師が担ってきた牧会奉仕は、役員と教会の構成員が務めることになりました。

そこで、私たちは未経験の事態に直面することになりました。教会内では、礼拝、賛美、教会運営についての見解の相違が生じてきました。教会内では、正しい聖書理解とは何かという議論が生じ、下手をすると分裂かという局面にもあいました。しかしながら、主はその試練を通して教会員に自立を促してくださいました。主は私たちの教会に、世界各地から多くの優れたメッセンジャーをお送り下さいました。牧者を失った教会に、それは時期に叶ったものでした。その外来メッセンジャーの説教テーマは、毎回私たちを励まし、教会の一致を計る上で、大きな役割を果たしてくれました。

外来牧師によって

その外来講師の一人が、リーベンゼラ宣教団の宣教師子息であるマイヤー・マルチン牧師でした。マイヤー牧師は茨城で生まれ、一七歳まで日本で育った方で、〝日本人〟の文化と心を理解できる方です。またドイツ語と日本語の二言語を、難なく駆使される方でもあります。マイヤー師は、母国ドイツにおいて神学教育を受けた後、宣教師として〝生まれ故郷〟日本に帰り、宣教師として、また奥多摩福音の家の責任者としても、十余年間も仕えられた方です。マイヤー牧師の人生はルツ夫人とともに、日本と日本人のために捧げられたものでした。その後、マイヤー師夫妻はドイツに戻られましたが、在欧日本人の救霊への情熱は冷めることがありませんでした。帰独後も、南ドイツで学生や地域の家庭集会で聖書を教えておられました。

二〇一二年暮れ、私たちスイス日本語福音キリスト教会は、マイヤー牧師に年間を通じて月一回は、お越しいただきたいとお願いしました。そして、礼拝においては統一性をもつ聖書メッセージを依頼しました。それが「エペソ人への手紙」講解シリーズで、パウロ書簡前半の難しい神学部門を、額に汗を流しつつ日独両国語で解き明かしてくださいました。それは創立二〇周年記念を目前に、イエス様を礎石とする教会作りにどれほど寄与して下さったか計りしれません。

マイヤー牧師の就任

さらに、主は何とそのマイヤー牧師をスイスJEGの後任牧師として召してしてくださいました。二〇一四年一月一二日、マイヤー牧師は幼少時から知り、師の父上から聖書の薫陶を受けた田辺正隆牧師によって、按手を受けられました。神の奇しき「みわざ」を見る思いでした。二〇一三年一一月、創立二〇周年を迎えたスイス日本語福音キリスト教会は、三代目の専任牧師マイヤー・マルチン牧師を迎えました。そして、神の御国を目指し新たな一歩を踏み出しました。

「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」
（伝道者の書　3・11）

Ⅱ スイスJEGの働き ①

ニケ国語で持てる礼拝の恵み

礼拝風景（田辺牧師就任後）

田辺牧師が就任される以前から、私たちの教会に集うスイス人やドイツ人のために、元宣教師らによって説教が日本語からドイツ語に、また反対にドイツ語から日本語へと通訳されていました。

これは、日本語のみで説教がなされる欧州の日本人教会において、極めて例外的で珍しいものでした。それまでの欧州の日本人教会は、まさしく日本人と少数の日本語がよく解る欧州人のためであったからです。しかし、それは週末を家族と共に過ごす欧州的価値観や、健全な家庭形成という観点からみても、好ましいものではありませんでした。言葉の問題で、日曜日に家族の一部や伴侶が家に残されるという不自然な結果をもたらしていました。言葉が障害となって、国際結婚した夫婦の片方、あるいは家族の一部しか教会に参加できないのでは、教会に未来は無いと考えました。そこでスイスJEGは、家族全員が救われることを目指し、また真の神を知らない方々のために、愛の実践ととりなしの祈りをしを始め今に至っています。

そういうわけで、田辺牧師が就任された翌年（二〇〇一年）から、毎回、例外なく通訳がつきました。主は通訳者として多くの元宣教師、スイスで学ぶ宣教師二世、優れた言語能力を持つ日系二世の方々を備えてくださいました。

（つづく）

Ⅱ スイスJEGの働き②

かつて日本で教会生活を経験し、様々な賜物を持った駐在員家族が日本人教会に加わると、その教会が一時的に隆盛をみることがあります。しかし彼らが仕事の任期終了や転勤により去られると、教会活動が遅滞し出席者が減少し、元の状態に逆戻りすることもあります。欧州の日本語教会はこれまでと同様に、駐在員家族や留学生を神の家族の一員として暖かく迎え入れると共に、永住家族にも言葉や民族の壁を乗り越えて、福音を伝えていく必要があります。スイスJEGではその意味で、少数者でも優しい環境を目指してきました。その結果、国際結婚組の夫婦や、子供がいる家族が何組も加わり、それぞれに居場所が与えられてきました。そして今、主の祝福をいただきバランスが取れた群れとして、少しずつ成長してきました。

家庭集会

私たちは月に二度の主日礼拝を補うものとして、家庭集会がスイス各地（オルテン、チューリッヒ、サンクトガーレン、ベルン、バーゼル）と、南ドイツのメアスブルグで月に一度か二度開催しています。これらの集会は福音を広める伝道所として、教会への地理的、心理的距離を感じる邦人や、聖書に生きる目的や心の糧を求めるノン・クリスチャンにとって、大きな意味を持っています。理想的には、教会で毎日曜日に礼拝が行われることです。そして家庭集会開催の頻度が増し、互いの交わりが深められ、喜びや悲しみが分かち合われ励まし合うことです。しかし現実的には、距離的な隔たりが実現を妨げています。

それぞれの家庭集会は田辺牧師ご夫妻によって、み言葉を基に霊的にリードされて来ました。家庭集会での聖書の学びを通して救われる方々もあり、大きな恵みとなりました。牧師が参加出来なくても、信徒によって家庭集会が立ち、宣教の使命が果たせるように、リーダー養成が重要な課題となっています。当教会はこれから、力を注いでいかねばならない分野の一つです。

兄弟宅での教会ピクニック

ニュースレター

スイスJEGでの多岐に渡る働きは、教会員の忠実かつ犠牲的な奉仕によって支えられています。当教会はヨーロッパの日本語教会のハブ（中心的）教会、と呼ばれることがあります。宣教の前進には、ネットワーク、チームワーク、フットワークが、しっかりと結び合っていることが不可欠です。そのため当教会は、欧州に散らばる日本語教会と祖国を結ぶ、「架け橋」としての役割に召されています。

そのネットワーク構築のために用いられたのが、当時普及し始めていた電子メールを利用したネットワークです。二〇〇一年八月に第一号が発行され、二〇一五年二月で一四九号となりました。はじめは当教会内での情報伝達を目的とした簡単なものでした。その後、教会員による〝小さな証〟をはじめ、欧州日本語教会や世界各地からの情報、そして主の証し人である兄弟姉妹の寄稿も加わり、内容も多彩なものとなってきました。北イタリアで三年前から開催されている次世代リーダーを養成するリトリート〝SLIM〟や、今年で第三三回となる〝ヨーロッパ・キリスト者の集い〟の証と感想集の編纂も任されています。現在、ニュースレターの送付先は、スイス並びに世界各地で二〇〇名余りですが、All Nations Returnees Connectionのホームページや当教会のホームページで読まれる方々も含めると、その数はまさしく神様のみがご存知です。

S姉妹は、このニュースレターの大切な校正を二〇〇七年から献身的にして下さっています。彼女は次のように言われています。〝ニュースレターの作成と送付は、神様の限りない大切なミッションの一部に関わらせて頂くことです。聖書には神様のお言葉が詰まっていますが、ニュースレターにはイエス様を信じ従う兄弟姉妹の多様な言葉が満載されています。ことばを通して、私達はお互いを理解し思いやり、悲しみや苦しみを共有する者となります。寄稿者の方々の文章に含まれる思い、祈り、願いを知り、それを伝えていく責任をいつも思わされます。そして読まれる方々が、慰めや励ましを受けられ、教えられたことを行動に移したりすることです。さらに主にある兄弟姉妹と、共に重荷を負い祈り合うためです。そして何よりも、神様ご自身を知って頂く為のミッションです。〟

神様の大きなミッションの一助とも言うべき、ニュースレター編集発行の営み、それはからし種のような働きでしょう。私達は近い将来に、この尊い働きを次世代に引き継げることを願い祈っています。なお、このニュースレターは当教会のホームページ www.jegschweiz.com にもアップロードされていますので、ご興味のある方はご覧下さい。

（つづく）

Ⅱ スイスJEGの働き ③

ヨーロッパ・キリスト者の集い

毎年、ヨーロッパでは主催教会と開催地を替えて「ヨーロッパ・キリスト者の集い」が開催されます。それは欧州在住の邦人キリスト者と、その家族のための修養会です。今年（二〇一五年）で三二回となり、今夏、古都プラハで開かれます。超教派で集うこの修養会には、欧州各地や日本から二五〇余名の兄弟姉妹が集まります。

イエス・キリストを救い主と告白する信徒たちが、互いの違いを越えて一ひとつとなり、主の体の一部として仕え合い、思いを一つにして支え合う姿は、世界各地のキリスト者にとっても励ましになっています。スイスJEGも神の家族の一員として、欧州宣教の働きに積極的に関わってきました。

この修養会にスイスJEGから参加者が増えたのは、フランス・パリ教会主催のリヨンでの第一九回の集いからでした。それ以後、毎年十数名から二十名あまりの参加者があります。この集いは欧州日本語教会の教会員の、献身的な奉仕の上に成り立っています。スイス教会では賛美、映像記録の収録、証と感想文編纂などの分野で奉仕をしています。更に、二〇一三年から代表者会議の依頼により、オフィシャル・ホームページを立ち上げ、これまでの貴重な資料や映像の管理運営を、神様の栄光を讃えつつ行っています。

スイスJEGが管理する「ヨーロッパ・キリスト者の集い」オフィシャル・ホームページ

www.europetsudoi.net/

創立二〇周年を迎えたスイスJEG

スイス日本語福音キリスト教会（JEG）は、二〇一三年一一月二三日に創立二〇周年記念礼拝を捧げる恵みに与りました。記念礼拝には、ここ数年増加した若者や子ども達と共に、一一月一日に専任牧師になられたマイヤー牧師、そしてスイスJEG創立に寄与された元宣教師の先生方の姿がありました。なんという奇しき神様のみ業でしょう。創立二〇周年記念事業の一つとして、ゲストに米国カリフォルニア州にある神学校博士課程で学ばれていた、岡田大輔牧師（日本聖書学院院長）を招きました。この特別セミナーは南ドイツで開かれ、テーマは〝聖書的教会形成〟でした。この特別セミナーにはスイスJEGに限らず、広く欧州日本語教会・集会からも参加者がありました。参加者三五名が七時間を越える、じつに濃厚な聖書の学びの時を持つことができました。私たちは創立二〇周年を迎え、信仰の原点に戻り、神のことばである聖書の文脈に添って正しく理解する重要性を再認識させていただきました。それは救われたキリスト者として、福音をスイスやドイツ在住邦人に宣べ伝えるため、スイスJEGが新たな一歩を踏み出すに相応しいテーマでした。

イスラエル聖地旅行

創立二〇周年記念事業の二つ目として企画されたのは、〝スイスJEGイスラエル旅行〟でした。それは二〇一四年七月に始まった、ガザ紛争の長期化を受け実施が危ぶまれた時期でした。しかし同年一〇月一二日（日）から一九日（日）まで、私たちは聖地旅行を催行することができました。イスラエルの歴史と現在を熟知し、イスラエル北部でお働きになったこともあるマイヤー牧師を団長として、一五名の参加者がありました。私たちはマイヤー牧師から、旧新約聖書舞台となったイスラエル各地を訪れ、聖書との深い関わりを詳しく解説していただきました。通常の聖地旅行団が足を運ぶことのない、西岸地区にあるゲリジム山やシロを訪れ、旧約と新約がそこで交差し一体化するのを体験しました。その結果、生きた聖書の世界を立体的かつビジュアル的に学ぶ、非常に貴重な機会が与えられました。その上、ヘブル的視点にたつ聖書の読み方に、心が一新させられました。

現在、会堂をお借りしているウスター市クリショーナ教会

このようにスイスJEGは、神様の素晴らしい恵みと導きの中で、二〇年という歩みをしてきました。人間に例えれば二十歳で、大人となる大事な節目でもあります。これから歩むべき道を考え、最も重要な決断をする時でもありましょう。スイスJEGの将来を考えるとき、我々は神の導き、守り、祝福の恵みに頼らなければならないことを十分に理解しています。同時に、ビジョンを持ち、主を見上げながら、心と力を尽くして前進することを願うものです。このビジョンは、二つの方向に分けられると思います。一つは教会内側に関して、もう一つはヨーロッパ各地在留中の日本人の救いに関するものです。

（つづく）

Ⅲ スイスJEGの今後

現在、会堂をお借りしているウスター市クリショーナ教会

スイスJEGのビジョン

スイス日本語福音キリスト教会には、次のようなビジョンが与えられています。

スイスJEGが建てられ二〇年と言っても、まだ若く未熟なものです。ですから、私たちは健全な愛に溢れる教会形成に力を入れたく願っています。それによって、私たちの今後の歩みをより確かなものにしたい希望しています。その点を具体的に挙げるならば、目標は次のようなポイントです。

○役員会・世話人会の制度は以前から導入されていますが、役員は聖書的な理解に立てば長老の役割であることを認識する必要があります。長老としての霊的責任を自覚し、教会員に仕える立場を目指しています。

○正しい意欲的な聖書の学びと、み言葉の取り次ぎを教会生活の中心に置きたく願います。教会員同士の交わりも非常に大切ですが、各自の霊的成長は、み言葉を通してのみ達成できることを確認します。

○私たちはみ言葉に集中しつつ、今の時代のしるしを見分けることも大切です。特に、神が選ばれたイスラエル民族を愛し、それに関する情報を大事にし、とりなしの祈りをすることです。

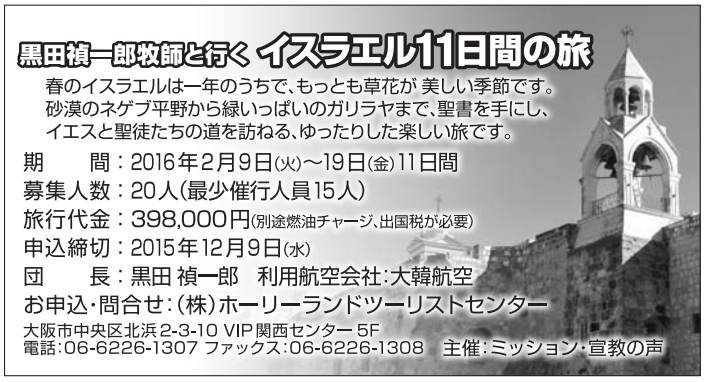
○教会内の若者たちの多くは、バイリンガル（二ヶ国語）で生活し、二文化を体験しながら育てられています。彼らへの対応と支援はとても重要であり、健康的な文化的アイデンティティーを身につけることが出来るよう努めます。そして世代差を越えて二ヶ国語で会話をし、霊的・精神的な指導に力を注ぐことです。

○スイス各地にいる日本人、特にチューリッヒ周辺に集中して住む日本人に伝道したく願います。ときには、教会で特別企画を立て、彼らを招くように力を入れたく願います。また教会から外へ出て行き、スイス日本人会はじめ各団体の企画イベントにも参加し、証しと福音を伝える場を用いたいと望んでいます。

ヨーロッパ在留邦人へのビジョン

二〇一六年夏、「ヨーロッパ・キリスト者の集い」が南独シュバルツヴァルドで開催される予定です。その時、スイスJEGは「ヨーロッパ・キリスト者の集い」の主催教会として、ヨーロッパ各地に点在する日本語教会、ならびに集会とのネットワークである絆を深めたいと願っています。そしてまた、毎年開催されるヨーロッパ教職者会議、ヨーロッパ・キリスト者の集い、SLIMカンファレンス等にも積極的に参加したく願っています。そして互いに神の家族として、お交わりを深めたく願っています。

スイスJEGでは定期的に「ニュースレター」を発行しています。私たちはその「ニュースレター」を用いて、ヨーロッパ各地に散在する日本語教会の情報を掲載していきます。そして互いのネットワークを用いて、祈りの課題を共有し合い、主にある交わりと連帯感を強めたく臨んでいます。

私たちのビジョンは、ヨーロッパの特にドイツ、スイス、フランスなどにある独立した日本人集会・聖書の学び会等の各集会を支えることにあります。そして、一人でも多くの日本人がヨーロッパ滞在中に、イエス・キリストの福音を聞き、信仰に導かれることを願います。そして、このミニストリーを担う牧師・宣教師を支える必要があります。そのために計画を立て、宣教ネットワークを築き上げることを目指しています。

今年で創立二二周年を迎えるスイスJEGは、二〇一五年九月により優れた可能性と広さを備えた新会堂に移転します。前述のビジョンは、主なる神の助けと導きがなければ実行することはできません。私たちは新しい地で主の体である教会として、更なる飛躍を目指したく願っています。そして主からのビジョンを抱きつつ、主のみこころが成りますよう祈り励みます。ここまで忍耐をもって、スイス宣教レポートをお読み下さった兄弟姉妹に、感謝を申し上げると共に、スイスJEGのためにお祈りを切にお願い致します。主の栄光がとこしえにありますように。（完）